

日英語会話におけるトピックが 変わる場所と会話の発展

工 藤 貴 恵

1. はじめに

会話において複数の会話参加者により相互的に構築されるトピックは単に“topic”や“discourse topic”と呼ばれ研究されてきた。Chafe (1994) は会話における情報の流れ (information flow) を論じる中で、情報はまず話し手の意識の中で active となり、それが“intonation unit”というまとまりで発話され、聞き手に伝わるとしている。焦点があった考えは“intonation unit”という単位で言語化され、それよりも情報量の多い話し手の semiactive な意識の中で一貫して関連付けられた出来事や状態のまとまりをトピックとした。つまり Chafe による会話におけるトピックは“intonation unit”よりも大きく、会話を意味をもったかたまりに区切るものであり、そのようなトピックの導入と発展により会話は構成されている。また Brown and Yule (1983) は、トピックとは会話の中で今何が話されているかに関する話者の認識であり話者が保持しているもの、つまりある瞬間において今話されていると解釈されているものとした。このように会話におけるトピックという概念は曖昧でつかみどころがなく、これまでのトピックの研究は会話全体の流れの中でのトピックを描写するというよりもトピックの導入 (introduction)、推移 (shift)、逸脱 (digression) の際に使われる discourse marker や turn-taking、floor との関連付けなどトピックを会話の中から一部を取り出して描写するものが多い (Shceglöff and Sacks 1973, Maschler 2009, Hayashi 1991, Uchida 2006, Lenk 1998)。

会話の流れの中でのトピックの動きに関する研究では、池田 (2008)、工藤 (2013) が日英語 2 言語を比較しながらトピックの展開を量的に分析し、日本語の方が英語よりも 1 つの話題を語る際副次的な話題を多く作り、頻繁にトピックを推移させるということを明らかにした。しかし今までの研究ではトピックがどのような場所で動き、その動きが会話にどのような影響を与えているかまでは描写されていない。

2. 本稿の目的

トピックの動きには、主流となるトピックから一時的に逸脱し、また元のトピックへと戻る *digression* と、あるトピックが新しいトピックへと推移する *topic shift* がある。本稿では話題を固定された実験的状況下において、会話参加者がトピックをどのように動かしそれが会話の流れにどのような影響を与えているかを明らかにするため、*digression* と *shift* 両方の現象を観察し、会話のどこでトピックが動き、そしてそれが会話に与える影響を比較考察する。

3. データ

本稿では「びっくりしたこと」について話すように指示された日英語母語話者それぞれ 10 組による自由会話を使用した。このデータは完全な自由会話ではなく、話すことがあらかじめ決められ、外部からの影響がない教室内で収録されたものである。このデータの特質によりトピックの動きを考察する際、トピックの質の違いや外的要因を除外することができる。更に日英語共に全て同一条件下でとられているので、比較分析に適しているといえる。

4. 結果と分析

4.1 分析基準

データの特徴により日英語両会話において「びっくりしたこと」について自身の経験やエピソードを語るという事が主に行われているため、本稿と同じデータを用いた池田 (2008) と Kudo (2013) では、まずびっくりしたことを会話の大きな枠組みとし、会話における上位の話題であるメイントピックとした。そしてびっくりしたことを語る中で出現する下位の話題をサブトピックと定めた。参加者の発話がサブトピックになり得るか否かは会話の流れの中で直前の発話やメイントピックとの関連を考慮し総合的に判断されている。本稿では先行研究で用いられたメイントピックとサブトピックという概念に、トピックの移行 (shift) と逸脱 (digression) という視点を加え分析する。

4.2 日本語のトピックの動き

先行研究によると日本語会話では英語会話に比べてサブトピックの数が多く、1つのメイントピックに対し4.55個のサブトピックが導入されるということが明らかになったが (Kudo 2013)、それらのサブトピックの特徴についての詳細は明らかになっていない。サブトピックを詳しくみると全てが同じ性質を持っているわけではなく、場所によって出現頻度が異なることが明らかになった。具体的に言うと、サブトピックにはメイントピックから逸脱させるものと、メイントピックから他のトピックへと移行させるものがある。そして出現場所に関しては、大きく分けてメイントピック内に発生するものと、メイントピック終了後の2か所に分けられる。つまり「びっくりしたこと」が全て語られる前に挿入されるサブトピックと、全て語られた後に挿入されるサブトピックとは質的に異なり、日本語会話においてはサブトピックのほとんどがメイントピック終了後に挿入される事が明らかになった。ここでのメイントピック終了とは、「びっくりしたこ

と」に関する 1 つのエピソードが完結したという意味である。

まずメインピックの途中に挿入されるサブピックの例を挙げる。

(例 1) 日本語会話においてメインピックの途中に挿入されるサブピック逸脱 (digression)

01R: びっくりしたことってなんだろう

02L: うーん＝

03R: ＝あ、そう、あたし、地方出身なん[だけど

04L: [え、どこ

05R: と、山形なん[だけど

06L: [ああ、そう、行ったことあるよ、山[形

07R: [え、うそ、なんで

08L: なんか、前、合宿で、米山、米山っ[てある？

09R: [あ、米沢？

10L: あ、米沢 {笑い} 行ったことある

11R: ああ、ほんと＝

12L: ＝うん

13R: で、それで＝

14L: ＝うん

例 1 では、02 までで参加者 2 人が話すべきトピックについて悩んでいるが、03 で R が「あ、そう…」と切り出して新たなメインピックになり得る話題を思いつき、話し始めている。しかしすぐにその発話を受け、L が 04 で質問をし、その答えに対し更に 06 で自分の経験を明かしている。L の 04 の質問と R による 05 での応答だけでは、トピックが動いたとはいええずこの段階ではまだ topic candidate (Linell 1998) である。しかし R による 05 の発話の内容に対し、更に L が 06 で情報を加え、その内容に対し 07 で R が質問をしている。R がもし L の 06 の発話に対し 07 のように強い反応を示さなければ、L が山形に行った事があるという話は発展しなかったが、07 の R の質問により、「話し手」の役割が R から L に移行したため、新たなトピックが生まれたと解釈することができる。このトピックはメイ

ントピックから派生したもののなのでサブトピックであるとカウントされる。またここでは13におけるRの「で、それで…」という発話からRが元々話そうとしていた03の続きであるメイントピックへと戻っているのも、04から12までの発話はメイントピックからの逸脱 (digression) であると解釈される。このようにメイントピックの途中で挿入されるサブトピックは一時的に容認されるが、すぐにメイントピックへと戻される。話し手の目的は「びっくりしたこと」について話すという参加者共通の目的でありそれがまだ達成されていないためメイントピックの途中に挿入されたサブトピックはあまり発展しない。また、このようなサブトピックは数も少なく10組の会話のうち1組のみでみられた。このようにメイントピックの最中に出てくるサブトピックは、話し手の発話により一時的に聞き手の中の情報が活性化したからであると考えられる。また例1においてはメイントピックの導入のかなり最初の方で、まだ会話の方向が定まっていない状態であり、中盤よりもメイントピックへの拘束力が低いから可能であったと考えることができる。

次にメイントピック終了後に挿入されるサブトピックの例をみる。メイントピック終了後にみられるサブトピックはメイントピックの途中で挿入されるものとは異なるふるまいをみせる。メイントピック終了後に挿入されるサブトピックには、メイントピックの内容との関連性が高いものと低いものがみられた。まず例2ではメイントピックとの関連性が高いものをみる。

(例2) メイントピック終了後に挿入されるサブトピック① 移行 (shift)

01R: {笑い} 超不意打ちだった、超びっくりした

02L: 怖かった？

03L: なんかさ、病院の匂いしない？ [すごい

04R: [うん、すごい病院の匂い

05R: さ、中はさ、超いろいろあるじゃん

06R: 本当にさ、いろいろさ、部屋があつてさ、超びっくりして

07L: 人出てきた？

- 08R: 出てきた。追っかけら、なんか、そこまでじゃないけど、追っかけ
られたりして
- 09R: そう、びっくりした
- 10L: お化け屋敷系びっくりするね
- 11R: [そうだね]
- 12L: [ラクーアのお化け屋敷行ったよ]
- 13R: うそ、怖かった？
- 14L: うん、怖かった。ダメなんだよ、私結構、[お化け系]
- 15R: [あ、そかそかそか]
- 16L: ジェットコースター平気だけど
- 17L: フジヤマ超楽しいよ[ね]
- 18R: [{笑い} フジヤマ乗ったよ]
- 19L: 楽しかったよね、びっくりしな[いけど]
- 20R: [{笑い} もうさー、だから本当]
- 21R: 超叫んで、びっくりして {笑い} =

ここでは 01 の前までに R が遊園地のお化け屋敷に入った際、中で人に追いかけられたり急に備品の椅子が動いたりして驚いたというメイントピックを導入し 01R で説明を終えている。紹介しようとしていたメイントピックを一通り話終えた事は「超びっくりした」という発話から理解できる。それに対し 02、03、07 で L は同じお化け屋敷に行った時の記憶に基づく質問をしている。それらの質問を含む 02 から 11 までの会話は一見メイントピック終了後に新たなトピックが導入されたようにも見えるが、06 での「超びっくりして」や 09 の「そう、びっくりした」という R の発話によりメイントピックに関連付けられ、トピックが完全に移行しない。しかし 10 と 12 の L の発話によりトピックは動く。ここで L は R の遊園地でのお化け屋敷の話から他の遊園地のお化け屋敷に行ったという話を導入し、それに対し R は 13 でそのトピックの発展を助長するような質問をすることで先行するメイントピックから派生したサブトピックへの移行を容認している。しかしその「他の遊園地のお化け屋敷」というトピックは大きく発展する前に、サブトピックを提供した本人である L によって再び R が訪れた

遊園地の話に関連付けられる。これは話し手の意識が、「びっくりしたことについて話す」という目的に向いているからであるからである。19のLの「びっくりしないけど」という発話によって、それまでの発話がびっくりしたことについて話すという当初の会話の目的からずれている事を認識しているということが明らかである。さらに20においてRは1と同じ発話を繰り返し、サブトピックへ移行してしまった今までの会話をリセットするように、メイントピックへと話を戻している。ここで見られるようにメイントピック終了後は自分の似たような経験や、既に出ている話題に部分的に関連するような話題が頻繁にだされる。ここではサブトピックからサブトピックへとどんどんとトピックが移行(shift)していくが、参加者の意識が完全に「びっくりしたこと」から遠のいているわけではないことが発話からわかる。この例にみられるサブトピックは全て遊園地関連としてくる事ができ、それぞれのサブトピックはメイントピックとキーワードを共有することで高い関連性を保っているといえる。

サブトピックからサブトピックへと移行を繰り返すうちにメイントピックとの関連性が低くなる例もある。

(例3) メイントピック終了後に挿入されるサブトピック 2→1 移行 (shift)

01R: 帰りたくないとかいって暴れてるのをおさえて、体中があざだらけだったと

02L: えー、えっ、オーストラリアのどこ[に行ったの

03R: [シドニー＝

04L: あー、メジ[ヤーだね

05R: [うーん、えーどっかいたりした

06L: オーストラリアはねー、あれ、あそこ、ブリスベン

07R: あー、ねー、すごいいいんでしょ

08L: えー、でも日本人ばかりだよ、なんかかんこうじん、韓国人とか

09R: あー韓国人多いよ[ね、どこ行っても

ここではRが1までで留学先のオーストラリアから戻る際の送別会でびっくりした話をし、1の段階では既にその話の概要は説明し終わっている。そしてLの2の発話から焦点が「びっくりしたこと」から先行するメインピックにでてきた「オーストラリア」という場所へとずれ、会話がメインピックからサブトピックへと移行していく。まずLの2の質問をきっかけにRが5でLに聞き返すという流れで「オーストラリアの都市」に焦点が当たったサブトピックが確立している。そしてLの8の発話とそれに対するRの9の発話によって今度は会話の焦点が「韓国人」へと移り新たなサブトピックが作り出されている。そして例4に示されるように、ここから更に「韓国人が多い」というサブトピックが続く。

(例4) メイントピック終了後に挿入されるサブトピック 2→2 (shift)

(例3 続き)

- 10L: [多いー、ね、オーストラリア多いよね、
 11R: [あ、そうなんだー
 12L: [あんま、え、多く、なんかシドニー多くない
 13R: 多かった
 14L: [多いよね[、安心、安全だしね、でもあざだらけだ
 15R: [うーん、そうお
 16R: [なんかいった、でなんか
 17L: [すごい
 18R: んー、で、友達、Kさんは
 19L: [あー
 20R: [ニュージーランド行っただけ[どー
 21L: [おー
 22R: ちょーコリアンがやっぱり多いっ[つってた
 23L: [あー[ね、韓
 24R: [なんかどこいっても多いらしい
 25L: ね、韓国人なんか英語好きだよな
 26L: [英語好きっていうかなんか受験とかすごいしね
 27R: [と、そうそうそう
 28R: そうー

29L: 絶対

30R: しかも結構かなり積極的だよ

31L: うん、積極的[だねー

ここでは9Rで「オーストラリアには韓国人が多い」というサブトピックが挿入され14Lまで継続する。14のLの「でもあざだらけだ」という発話はメインピックの「目が覚めたら痣だらけでびっくりした」という内容に関連したものである。しかしRはその発話をうけてもメインピックに戻したり、新たなメインピックを導入したりすることなく、「オーストラリアには韓国人が多い」というサブトピックから「ニュージーランドにも韓国人が多い」という直前のサブトピックと関連性の強い新たなサブトピックを導入し、24Rまで継続する。そしてそれまでの英語圏に韓国人が多いという話題を総括し25Lで「韓国人は英語が好きだ」という発話がなされ、ここで会話の焦点がずれサブトピックが終了する。この発話は専攻するサブトピックを終了させると同時に次のサブトピックへの置き石にもなっている。つまりこの発話によって「英語圏に韓国人が多い」という限定的なトピックから「韓国人は…」から始まる一般的なトピックへとトピックの幅が広がり、「韓国人は積極的である」という30Rの新たなサブトピックが生まれたと言える。例3と例4を合わせてみるとメインピック終了後から、徐々にトピックがずれていき結果的に会話がメインピックとは全く関係のないものになっている事がわかる。ここで見られる「韓国人」というキーワードはSacks (1992) の提示した“inexhaustible”な尽きることのない“ultra rich topic”という性質を持ち、この後参加者は30Rによって導入されたサブトピックに具体的なエピソードを加え、しばらくそのサブトピックで会話を進行させていく。

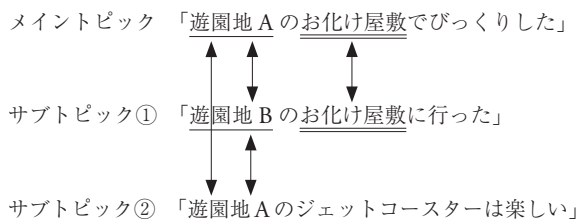
例1～4においてトピックが動くときは、どの例においても先行する会話の中にキーワードを見つけ、そこから新たなトピックを作り出している。Sacks (1992) や Jefferson (1984) が“stepwise”や“pivotal”と表現するように、トピックは会話の中で徐々にずれているというのがこれらの例からも

明らかである。しかし、よりマクロな視点からトピックの流れをみると、サブトピックのつながり方によって会話の流れが異なる事がわかる。

例1において、この会話メイントピックは「東京が地元（米沢）より暑くてびっくりした」で、サブトピックは「合宿で米沢に行ったことがある」である。一見この二つは「米沢」というキーワードで関連しているように見えるが、サブトピックが挿入された段階ではまだメイントピック導入部であり、まだ誰がどうしてびっくりしたのかの展開は話されていない。よってこのサブトピックはメイントピックではなく、直前の発話に関連しているにすぎない。

例2は「遊園地Aのお化け屋敷でびっくりした」というメイントピックから「遊園地Bのお化け屋敷に行った」、そして「遊園地Aのジェットコースターは楽しい」というサブトピックに推移している。図1に示された通り、メイントピックとサブトピック①は「遊園地」と「お化け屋敷」というキーワードでつながっている。そしてサブトピック②は「遊園地」というキーワードで直前のサブトピック①につながっていると同時に先行するメイントピックとも「遊園地A」というキーワードでつながっている。

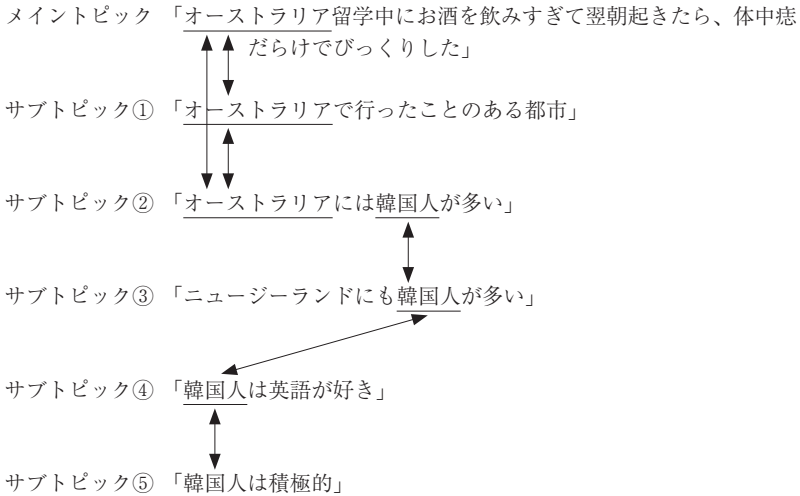
図1 例2におけるトピック推移



よって例2にみられるサブトピックは直前のトピックと関連しながらメイントピックともキーワードを共有し、会話全体としてある程度の一貫性を保っている様に見える。それに対し、例3と例4にみられるサブトピックは性質が異なる。例3と例4におけるメイントピックは「オーストラリア留学中にお酒を飲みすぎて記憶をなくし翌朝起きたら体中痣だらけでびっ

くりした」である。そこから「オーストラリアで行ったことのある都市」、「シドニーには韓国人が多い」、「ニュージーランドにも韓国人が多い」、「韓国人は英語が好き」、そして「韓国人は積極的」とサブトピックが続いていく。

図2 例3と例4におけるトピック推移



ここで見られるようにそれぞれのサブトピックは直前のトピックに関連しているものの、メイントピックへの関連はサブトピック②までで途切れている。また例2の会話においてはメイントピックとサブトピック①で2つのキーワードを共有しているが(図1参照)、ここではメイントピックからサブトピック①へと移行する段階でキーワードが1つしか共通しておらず、メイントピックとの関連度が低くなっている。また、サブトピック③からは完全にメイントピックとの関連がなくなっている。このように同じサブトピックでもメイントピックと関連の有無や程度によってその質が異なるということがわかる。

4.3 英語会話におけるトピックの動き

先行研究によると英語会話では日本語会話に比べてサブトピックの数が少なく、日本語会話で1つのメイントピックに対し4.55個のサブトピックが導入されるのに対し、英語会話においては2.77個しか導入されない(Kudo 2013)。量的研究においては日本語会話と英語会話では大きな差がみられたが、質的にはどのような違いがあるのかをここで分析する。まず日本語会話で1例みられた逸脱という現象は英語会話ではみられなかった。これは日本語会話同様「びっくりしたことについて話す」というデータの性質上、完全な自由会話に比べメイントピックへの拘束力が強いということが考えられる。また会話参加者が協力し合って会話を展開する日本語会話が「共話」型と描写される一方、話し手と聞き手の区別がはっきりし自分の意見を理解させることを会話の目的とする「対話」型とされる英語会話においてはあいづちなどを挟まず話し手の発話が完結するまで発話を控えるのが基本であるとされている(水谷 1993、メイナード 1993)。従ってトピックに関しても同様に、相手がメイントピックを話している間聞き手に徹した結果トピックの逸脱が起こらなかったと考えることもできる。

メイントピック終了後のトピック推移は例2と同じタイプのメイントピックからサブトピックへの移行がみられたが日本語の例3・4でみられたようなサブトピックからサブトピックへの移行は見られなかった。

(例5) メイントピック終了後にみられたサブトピックへの推移

01R: And then, it's like, 'Yeah, we're going to be moving in a month or so' ... and so ... I guess, it's more to say that ... the actual moving was sort of a surprising — shocking thing [because I had never done that before ... that I can recall.

02L: [Okay, right ... okay ... Yeah.

03R: And, so, but, after that we moved a lot, and so ...

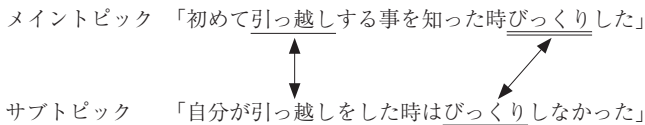
04L: Yeah[.

05R: [It sort — I sort of got used to moving, but, that first time moving was sort of like a surprising-shocking type thing.

- 06L: Yeah. I don't know, it was kind of . . . I don't know, [it wasn't surprising when I moved, but . . .
 07R: Ahh, what about the first time . . . You moved?!
 08L: It wasn't surprising [because I was like 'Yeah! I'm leaving!'] {laugh}
 09R: [Surprising . . .
 10R: I . . . [I can't really think of anything that I would consider really like a surprising thing.

ここでは R が「初めて引っ越しする事を知った時びっくりした」というメインピックを紹介し、05で「もう引っ越しには慣れたけれども、初めての引っ越しはびっくりでショッキングな出来事だったよ」とエピソードを話し終えている。そして 06 で L が新たに自分の引っ越しした時の話を始め、07 で R が「初めての引っ越しはどうだった? . . .引っ越ししたことあるの?」とその発話を受け入れることでメインピックから L が導入したサブトピックへと推移が完了する。ここにみられるサブトピックは図3で示されるように、メインピックと「引っ越し」や「びっくり」というキーワードを共有し、メインピックと関連性の高いサブトピックであると言える。

図3 例5におけるトピック推移



しかしそのサブトピックは長くは続かず 09 と 10 の R の「本当にびっくりしたことって思いつかないな . . .」という発話によってすぐに、新たなメインピックを探す会話へと導かれる。07R の “You moved?!” という発話から、R は L に引っ越しの経験があることを知らずそこから L の引っ越し先や時期に関する話題を広げることも可能であるのにも関わらず L も R も

08でLが「びっくりはしなかった」という発話を聞いた直後に被せるようにRは「びっくりしたことは考えつかない」という次のメインピックを探す発話を始めている。またL自身もその内容を詳細に話そうとする動きは見られない。これは、引越経験はあるがRとは異なりびっくりはしなかったからこの場で話すのにはふさわしくないと判断したからだと考えられる。これらのやり取りから英語会話では会話参加者が意識して「びっくりしたこと」を話そうとしていることが明らかである。よって英語会話においてサブトピックが少ないのは、サブトピックで会話の流れをつくるのではなく、あくまでもメインピックを主体とした会話を目指しているからであるといえる。これはメインピック終了後にサブトピック主体の会話を行う日本語会話とは大きく異なる。

日本語会話ではメインピック終了後、話し手、聞き手に限ることなくメインピックから次々とサブトピックを作り出し会話を発展させる一方、英語会話ではメインピックが会話全体の大部分を占める。そこで英語会話におけるメインピックをみると、サブトピックは見られないが聞き手による会話の進行を促す発話が多くみられた。

(例 6) 英語におけるメインピックの進行

01R: I was so mad. {laugh}

02R: But you know you're just in shock, you're just kind of like, 'eh . . . you just hit me', and then like, and then like, so I walked down and she like, moved out of the way and she got on the train, so I was like, 'okay, there'.

03L: Do you think she did it on purpose? Oh god.=

04R: =Cuz well, I mean, one I was in her way, two, like y . . . cuz I'm not, it's just one.=

05L: =Right, right.

06R: So, I was in her way, and she probably didn't like the fact that I was speaking English loudly, so I figured.

07L: Oh, whatever.

08R: So yeah, that's probably the most shocking thing lately. I'm still

angry.

09R: Almost everytime I think about . . . so mean . . . I really wanted to yell at her.=

10L: =You should have. {laugh}

11R: But you know like, you turn around and you just see this old lady in a kimono, you're just kind of like . . . [xxx.

12L: [Yeah

13R: You're just in shock and you're just kind of like, 'Ahh . . . I can't believe you just . . . '

14L: Hmm.

15L: Right on. {laugh}=

16R: =What about you?

ここでは R が「着物を着た女性に突然たたかれてびっくりした」というメインピックを 11 と 13 の「もし振り返った時着物を着た年配の女性がいたらショックで、あなたが... (私をぶったなんて) 信じられないよってなるだろう」という発話まで続けている。この会話の中で、メインピックの聞き手である L は 03 で「意図的だったと思う?」と質問をしている。これはメインピックの内容の詳細を問うもので、メインピックの内容を発展させるものとみることできる。また例 6 の会話はちょうど 1 つのメインピックが終了したところであるが、日本語会話でみられたようにメインピック終了後にサブトピックが追加されることはなく、16R の発話に見られるように即座に次のメインピック探しが始まっている。

英語会話における聞き手による会話の進行を促す発話は他の例にもみられる。

(例 7) 英語におけるメインピックの進行

01L: Yeah, I'm not joking, this is my first time riding the trains.

02R: Like women or men?

03L: Men. And . . . I was . . . and . . . I couldn't believe it . . . I was like . . . 'I'm [gonna be living here!'

04R: So there was like guys on top of your head?

- 05L: Yeah, but I didn't even know that . . . this was abnormal, like I didn't know there had been a wreck.
- 06L: And so, I was just like... cuz it's a long train ride, and so like 'there's like no way I'm gonna be able to do this every single day'.
- 07L: But . . . yeah . . . that was . . . I was . . . yeah, and that's the only time that it's ever happened.
- 08R: Oh really!
- 09L: And . . . but . . .
- 10R: Like was it just like one guy, or was there like twelve guys sitting on top of the train?
- 11L: There was probably (three) . . . (three).
- 12R: Big guys? [Little guys?
- 13L: [Like medium guys, yeah.
- 14R: And like there was girls underneath?
- 15L: Yeah, I mean everybody underneath. Is[n't that insane?
- 16R: [And no one cared? Like how did they get up there?
- 17R: Cuz the . . . you know the door goes like to your head.
- 18L: People . . . I know . . . but people were . . . I don't . . . {laugh} I have no idea, maybe they were friends. {laugh}
- 19R: You think — wow! =
- 20L: =Yeah. {laugh So what did you do?
- 21L: And so . . . I helped hold them, so it wouldn't like break your neck. {laugh}
- 22R: No kiddi[ng!

ここではLがメインピックの導入者で「日本の混雑した電車の中でみたびっくりしたこと」を話しているが、「それは女性? 男性?」(02)、「頭の上に人がいたの?」(04)、「1人だったの? それとも12人くらい?」(10)、「大柄? 小柄?」(12)、「女の子が下にいたの?」(14)、「誰も気にしていないの? どうやってその人たちは上に登ったの?」(16)とLが驚いた状況を説明している途中で頻繁にRが質問をしている。これらの質問は例6で見られたものと同様、すぐにメインピックへと戻されるためサブトピック

クとしてカウントされずメイントピックからの逸脱となることはない。これらの R による発話は先行する L の発話とキーワードを共有していないが、内容をみると R がメイントピックを理解する上で必要な情報を引き出すものである。つまり R は質問をすることにより必要な情報を集め、これから話されるかもしれない内容をあえて先取りして質問することでメイントピックの進行を促しているといえる。

以上をまとめると、トピックは日本語会話において頻繁に推移する一方で、英語会話においてはほとんどみられなかった。日本語会話では直前の発話や先行するトピックから共通のキーワードをみつけたり、自分の経験や知識と結びつけたりしながら、新たなトピックを作り出す動きがよくみられた。それが先行研究のサブトピックの量の多さへと関連している事が推測できる。それに対し英語会話ではあくまでもメイントピックの進行が優先され、メイントピック終了後においても日本語に比べあまり新たなトピックは生成されない。このことから英語会話はメイントピックからトピックを広げていくのではなく、既存のメイントピックの内容の充実を図るという特徴があると言え、これらのトピックの動きの違いが日本語と英語会話の流れの違いに大きく影響している。

5. 考察

ここでは前項で得られた結果から日本語と英語会話における会話構成の違いが何故起こるかを考察する。日本語会話ではメイントピック終了後にトピック推移が頻繁に行われ、時にはメイントピックとは無関係な会話にまで発展するという特徴がみられた。

トピック推移を詳細に観察すると、直前の発話やトピックに登場したキーワードの繰り返しによって起こっている。Tannen (1989) では、語や表現の一部を繰り返すことには会話に結束性を与える機能や会話参加者の相互理解を促し関係を築き上げる機能もあるとしている。よって相手の発話中の語の繰り返しによって起こるトピック推移にも、相手への共感や理解

を示そうとする機能があるといえる。また前に語られた内容と似たような経験について語ることは *story rounds* (Tannen 1984) や *second story* (Sacks 1992) と呼ばれるが、日本語にはこれによって起こるトピック推移も多くみられた。串田 (2006) は会話において経験を述べる「私事語り」の形成手順を説明する上で、会話の中で参加者同士が共通の経験を発見し交換する行為は共感を表す手段の一つであると述べている。これを踏まえると、例 1 においてみられたメイントピックの途中で突然トピックを逸脱させ自らの合宿体験を述べる行為や、例 2 での相手のお化け屋敷での体験から自分の別のお化け屋敷での体験へとトピックを推移させるという行為は共感を示す行為であると理解することができる。また「実際には別々の場所で経験したこと」を「今ここ」で参加者が類似体験を共有することは「お互いの生活史上で分離されていた出来事を一緒に経験し直す機会を提供」し、「発見された共通経験」を「共有経験」として経験し直すことにつながる (串田 2006)。つまり日本語の例で見られたような共通経験を語ることによって起こるサブトピックへの推移は全て経験を共有する事につながり、参加者同士が共感を示しあう「共話的」な談話を構築しているといえる。

また日本語会話においてメイントピック終了後に多くサブトピックが挿入される事に関しては、話し手、聞き手に関わらず、両者が思いのまま自由にトピックを提供しあうという面で、Yamada (1992) が日本人とアメリカ人の会議におけるディスコースを研究し、アメリカ人の会議ではあらかじめ決まった議事に従い参加者がそれぞれ自分の持つトピックを導入する機会を何うのに対し、日本人の会議では議事に対し参加者個人でなく全員が共同で責任を負い、基本的にはどの参加者がどんなトピックをいつ導入してもよいとされると明らかにした研究や、参加者全員が *floor* を共有する *collaborative floor* (Hayashi 1991) という状態に通じる。メイントピック内でのトピックの動き、つまり逸脱があまりみられなかったのは実験的状况下で「びっくりしたことについて話す」という目的を達成しようとする意識が強く働いたからである事が推測できるが、一人がメイントピックを話

終えた後すぐに新たなメイントピックを探そうとする英語会話に対し日本語では次のメイントピックを探す前に、先行するメイントピックからサブトピックを派生させることで *common ground* (Tannen 1989) の形成を重ね相手のメイントピックへの理解や興味を示していると言える。日本語会話は実験的状况下においても、メイントピックが終了したと思われる時点で一時的に課題遂行の目的は達成され、次のメイントピックが始まるまでの間、頻繁にトピックを推移させる。日本語会話では類似経験を話したりキーワードを抽出してそこから新たなトピックを作り出すことで、会話の場に提供されたトピックへや相手の発話への興味や共感を示し、会話の発展を助ける。一方で、英語会話においては1つのメイントピックが終わってもその次のメイントピックがすぐに始まる事が多く、聞き手はメイントピックの進行を促すような発話を挿入することで会話を発展させていく。

6. まとめ

本稿では実験的状况下において特定のトピックを話すように指示された場合、会話の主流となるメイントピックからトピックがどのような逸脱、推移を経て会話が流れていくか質的分析を行った。そして日本語では相手の発話やトピックの中に自分との共通項を見つけ出し、サブトピックとして会話に挿入し聞き手と共有するという会話のスタイルを持つことが明らかになった。一方、英語会話では、日本語会話の様に共感を示すサブトピックへの推移はあまりみられず、会話はほぼメイントピックで成り立つということが明らかになった。しかし、英語会話において参加者間のやり取りが全く行われていないという事を意味するのではない。英語会話ではトピックの逸脱や推移はあまり見られないがメイントピックの進行を促す発話が多くなされ、それによって話し手への共感や理解を示している。

参考文献

Brown, P. and Levinson, S. 1987. Politeness: some universals in language usage. Cam-

- bridge University Press
- Brown and Yule. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.
- Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The flow and displacement of conscious experience in speaking and writing*. University of Chicago press.
- Hayashi, Reiko. 1991. "Floor structure of English and Japanese conversation." *Journal of Pragmatics* 16 (1): 1–30.
- 池田麻子. 2008. "A Comparative Study of English and Japanese: How topics are structured in conversation." *日本女子大学英米文学研究*, 43, 199–218.
- Jefferson, Gail. 1984. "On Stepwise transition from talk about a trouble to inappropriately next-positioned matters." *Structures of Social Action*, ed. J. M. Atkinson and J. Heritage. Cambridge University Press.
- Kudo, Kie. 2013. How do participants change topics under the experimental situation? *杏林大学研究報告 (教養部門)*, 30.
- 串田秀也. 2006. 相互行為秩序と会話分析——「話し手」と「共一成員性」をめぐる参加の組織化. 世界思想社.
- Lenk, Uta. 1998. *Marking Discourse Coherence: Functions of Discourse Markers in Spoken English*. Gunter Narr.
- Linnel, Per. 1998. *Approaching dialogue: talk, interaction and contexts in dialogical perspectives*. John Benjamins.
- 水谷信子. 1993. 「共話から「対話」へ」. *日本語学*, 4, 4–10. 明治書院
- Sacks, Harvey. 1992. *Lectures on Conversation: Volumes I & II*. Blackwell Publishers.
- Schegloff E, A. and Sacks, H. 1973. "Opening up closings." *Semiotica*, 8, 289–327.
- Tannen, Deborah. 1984. *Conversational Style: Analyzing Talk Among Friends*. Oxford University Press.
- Tannen, Deborah. 1989. *Talking Voices: Repetition, dialogue and imagery in conversational discourses*. Cambridge University Press.
- Uchida, Lala. 2006. "Interactiveness of Turn-taking in English and Japanese from the Functional Perspective." *東京電機大学総合文化研究*, 4, 99–106.
- Yamada, Haru. 1992. *American and Japanese Business Discourse: A Comparison of Interactional Styles*. Ablex, Norwood, NJ.
- Yael, Maschler. 2009. *Metalanguage in interaction: Hebrew discourse markers*. John Benjamins.